

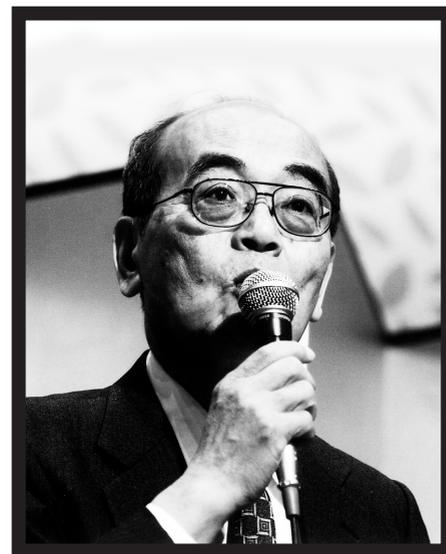
本誌論説委員・山浦嘉久逝く

本誌論説委員の山浦嘉久が去る九月十五日午前四時に死去した。

七十四歳の誕生日を目前にしての、大往生だった。人生は長きが故に貴きにあらず。為すべき道を知り、その道を貫くことに全生命を賭すこと

にこそ、人の価値があるのだ。山浦は日本国の真姿を顕現すべく尽瘁した人だった。

『月刊日本』創刊当初から、連載「国際政治一刀両断」、「世界情勢を讀む」で健筆を揮い、変転極まりない世界情勢を独自の視点で



検証しつつ、我が日本国の自立自尊・自主独立を熱く説き続けた。
昨年四月二日、軽度の脳梗塞で入院、以来、懸命に治療を続け、一時は会話もできるほど回復した。しかし、この九月十五日、従容として逝った。心からご冥福を祈る。
(南丘)

「山浦嘉久さんを偲ぶ会」のご案内

- 日時 令和元年11月28日(木) 午後6時～8時
- 会場 レストラン楠亭 東京都新宿区戸塚町1-104 (早稲田大隈会館内1階) 電話:03-5285-1121
- 会費 5,000円
出席される方は事前に事務局にご連絡ください。地図は月刊日本HPをご覧ください。事務局 電話:03-5211-0096

「この国」と言うな、『わが国』と言え!

元衆議院議員 元本誌編集委員 野間 健

山浦さん! 早すぎる死を悼む、などといったありきたりな言葉は山浦さんへの惜別には似合わない。

山浦さんはその生涯を、時代と格闘しながらも、好きなように、堂々たる論陣を張りながら、終えた。とりわけ、いかなる権威や権力にも阿ることなく、浪人として人生を全うしたことは、私たちの憧れだった。

山浦さんが私たちによく論じてくれたこと。「この国」と言うな、「わが国」と言え!

司馬遼太郎の『この国のかたち』という連載が端緒となり、日本人は瞬く間に、「わが国」を第三者的

評論家的に突き放して、「この国」と言い始めた。日本人の当事者意識の欠如を鋭く感じ警鐘を鳴らしたのが山浦さんだった。わが家を、この家、と言う奴がいるか! わが子を、この子、と言う奴がいるか! おかしいと思わないか? まさにその通りだった。いつの間にか日本人は自分の国を失っていたのだ。

山浦さんの北朝鮮論も独特なものだった。北朝鮮金王朝は大日本帝国の残置国家である。

神武天皇以来の日本の歴史・神話をなぞり、檀君神話から発した金氏朝鮮王朝を確立することで、族譜支配の宿痾から朝鮮民族を解放するといふ、金策など日本にルーツを持つ北朝鮮建国時のリーダーたちの構想を明らかにしたのは、山浦さんの功績である。金日成などかつての北朝鮮指導部

は、旧宗主国日本はアメリカの飼犬になってしまったが、自分たちは大東亜戦争を継統中だ、という自負心、誇りを持っていた。そこには日本の目覚めを期待する思いも秘められていた。

山浦さんが断筆せざるを得ない健康状態になった時期は、金王朝三代目がアメリカとの取引を始めた時と重なっている。日本の目覚めにはもはや期待できない。直接日本の飼主とやりあわねばならない。

山浦さんの死は、日本に対する深い諦念なのか、あるいは諫死なのか。あとに残されたわれわれは、山浦さんが説き続けたわが国の真の独立を果たすまで、山浦さんの面影を胸に宿しながら歩き続けなくてはならない。

山浦さん! ありがとうございました。

合掌